

Life on the Mississippi について

—— 承 前 ——

有 川 昭 二

旅

Life on the Mississippi の後篇にあたる部分は、第21章から第60章まで、Mark Twain が pilot を止め、21年の後に再び Mississippi 河を訪れた時の体験豊かな旅行記として書かれている。Mark Twain は待望の pilot になり、生涯をそれで送っても悔いない程の気持ちを抱いていたのだが、1861年南北戦争が起り、河の通商が止絶えてしまうと、その職を失ってしまった。そして Nevada や California で銀や金を採鋳したり、新聞記者になったり、通信員としてヨーロッパ旅行をしたり、又 a scribbler of books (三文文士) として New England に腰を落着けたりして21年が過ぎた。併しその目まぐるしい21年の歳月でも消し去る事の出来ない一つの夢が Mark Twain にはあった。それは再び、Mississippi 河を訪れるという望みであり、そこに浮ぶ steamboat を眺め、かつて交際のあった人々に再び会うという強い望みであった。我々は Mark Twain が深い愛情をもって pilot の世界を表現した Life on the Mississippi の前篇において、既にこの純粋に個人的な望みを予見する事が出来る。いずれにしろ、⁽¹⁾ Mark Twain は取るものも取敢えず、何かに引き込まれるような心の傾斜を抱いて、New York から Pennsylvania Railroad に乗り込んだのだと思われる。それは1882年4月18日、午前8時の事であった。St. Louis をふり出しに、Mississippi 河沿岸の町々を歴訪するのである。St. Louis から60哩下流、昔フランスの植民地であった St. Genevieve (Missouri)、石灰や石炭の町 Grand Tower (Missouri)、Missouri 州のアテネと云われる Cape Girardeau、Ohio 河との合流点にある Cairo (Illinois)、美しい岡の上にあり、煙草産地をひかえている Hickman (Kentucky)、昔と殆ど変わっていない New Madrid (Missouri)、かつて黄熱病のために死の町と化した Memphis (Tennessee) 新しい町 Arkansas City、かつては郡庁所在地として栄えながら、今は河底に沈んでいる Napoleon、その Napoleon とは比べものにもならない一寒村であったのに、今は賑やかに栄えている Greenville (Mississippi)、灰色の古びた Spanish moss を垂らした街路樹のある南部らしい町

Lake Providence (Louisiana)、南北戦争の激戦地 Vicksburg (Mississippi)、美しい hill-cities の最後の町である Natchez (Mississippi)、いささかの修正や妥協もなしに真の南部と呼びうる町 Baton Rouge、Mississippi 河河口の町 New Orleans、ここまで5日の日程を要している。New Orleans から帰途についた Mark Twain は更に船旅を続け、St. Louis から北上して the Upper Mississippi の町々を訪問する。その中には、この旅の主な目的地の一つである故郷 Hannibal (Missouri) も含まれており、更に St. Paul (Minnesota) —— New Orleans から2,000哩、所要日程10日 —— Minneapolis (Minnesota) まで及んでいる。それは実に one of the most enjoyable five-thousand-mile journeys であった。

Mark Twain は New York を発った翌朝、まだ St. Louis に着かないうちに西部特有の full goatee (長くのびた山羊髭の男) に接し出すと、次のような感懐を抱いている。

; it was like running suddenly across a forgotten acquaintance whom you had supposed dead for a generation. The goatee extends over a wide extent of country, and is accompanied by an iron-clad belief in Adam, and the biblical history of creation, which has not suffered from the assaults of the scientists.⁽²⁾

30年も前に死んだと思って忘れていた昔の知人に突然出会うというこの感じは、その唐突さ、その烈しさにおいて十分に romantic で、eventful であり、何か人生というものを感じさせはするが、その個人性はどうすることも出来ない。このような感情は飽くまでも個人の問題なのである。ところが後半の、科学者の攻撃をうけていないアダムや聖書に対する根強い信仰となると、事情は変わってくる。これは単に個人的な問題という事は出来ない。そこには科学と宗教(信仰)、知性と原始性、文明と大自然、或は東部と西部、都会とフロンティアというような、個人以上の大きな問題が含まれている。つまり Mark Twain は個人として、懐旧の念もだし難く旅に出たといっても、それは単に個人的な追憶とか感傷にとどまるのでなく、作家として Mississippi 河の flush

timesの歴史を最後まで見とどけ、それによって、一つの時代の証人たらしとする決意をはっきり抱いていたのである。

時 の 流 れ

Mark Twain は乗り込んだ船の pilot から南北戦争の一捜話 the famous battle of Belmont について話を聞き、次のように述べている。

; so to me his story was valuable—it filled a gap for me which all histories had left till that time empty. 3)

又故郷 Hannibal の小さな留置場 “calaboose” 内で焼け死んだある酔っ払いの事について

Observe, now, how history becomes defiled, through lapse of time and the help of the bad memories of men. 4)

更にやはり戦争について, Jackson's victory over the British, January 8, 1815—両国間に和睦は成り立っていないながら, 戦線までその知らせが届かなかった—に関して

If we had had the cable telegraph in those days, this blood would not have been spilt, those lives would not have been wasted; …… 5)

St. Paul の教会堂建立で働いた the poor Irish “hired girl” については

In fact, instead of reflecting that “every brick and every stone in this beautiful edifice represents an ache or a pain, and a handful of sweat, and hours of heavy fatigue, contributed by the back and forehead and bones of poverty,” it is our habit to forget these things entirely, and merely glorify the mighty temple itself, …… 6)

Mark Twain は pilot の頃, 自分の身代りに弟 Henry が乗っていて死んだ Pennsylvania 号や, 今度の旅でその直前に運よく他船に乗り換えた Gold Dust 号の悲惨な爆発事故に, 人力では如何ともし難い一種深い運命を感じている。併しそれとは別に, いわゆる「歴史」については, 上に引用したように, 先ずその gap と歪みを鋭く感じとっていたし, 又文明の利器という意味で機械を信じ, 歴史の実体としては, 名もない庶民の苦しみを理解していた。

このような Mark Twain が, 旅に出て先ず眼をみはるのが, 21年という時の流れがもたらした色々な変化の姿であった。それは具体的には1) 沿岸の町々, 2) 河の生活, 3) 鉄道や農産業の変化に分類出来る。

1) 町々の変化

一, 二例をあげると

イ, St. Louis ……町の大きさは二倍になり, 人口は40万となっている。町をおおっている石炭の煙は昔に比べたら大分薄くなっているが, まだまだ多い。繁華街には大して変化はないが, 郊外の住宅地は大いに変っている。昔はブロック毎に同じ窓の同じ形をした家々がゴチャゴチャと集まっていたが, 今は独立した noble and beautiful and modern な家々が, それぞれの周りに美しい芝生を見せている。美しくて広い the Forest Park, 植物園, どっしりした公共建築物。道路は依然として狭く, 舗装もまだ行きときとどいていないが, 街燈は明るく照り映えている。これらの変化は, St. Louis の progress, energy, prosperity を証拠づけるものであった。

併し変化の中の変化は別にあつた。それはかつては無数の船が威勢よく碇泊していた “levee” (堤防, 波止場) の嘘のような寂れようであった。

Half a dozen lifeless steamboats, a mile of empty wharves, a negro, fatigued with whiskey, stretchd asleep in a wide and soundless vacancy, where the serried hosts of commerce used to contend! Here was desolation indeed. 7)

河岸沿いの泥んこの道路の悪さは昔のままで我慢出来るとしても, 群れ集う馬車や押し合う人々の群れや, 山なす貨物はどこへ消えてしまったのだろうか?

ロ, Hannibal ……一寒村に過ぎなかった Mark Twain の故郷 Hannibal はもはや村ではなく, 市長と市議会と上水道と恐らくは負債をかかえた市となっている。人口15,000, 道路も舗装され, 6本の鉄道が集まる停車場も10万ドルで出来上り, 賑やかな活気に満ちた町である。

2) 河の生活の変化

Mississippi steamboating は1812年に起り, それから30年間は隆盛の一路をたどったが, 次の30年が過ぎないうちに衰えてしまった。以前の旧式の keel-boating をスピードの点で打ち負かし, 駆逐していながら, 今度は逆に旅客は鉄道に, 貨物は費用の掛らない towboat(引き船) に奪われる破目になったのである。この衰微の状況について Mark Twain は, Tennessee 州 the Obion River の河口附近を叙して

all day we swung along down the river, and

had the stream almost wholly to ourselves. Formerly, at such a stage of the water, we should have passed acres of lumber-rafts and dozens of big coal-barges; also occasional little trading-scows,……; possibly a randow scow, …… But these were all absent. Far along in the day we saw one steamboat; just one, and no more.⁸⁾

又 St. Louis から St. Paul へ向う船の中で、次のような話も聞いている。

Eight years ago a boat used to go up the river with every stateroom full, and people piled five and six deep on the cabin floor; and a solid deck-load of immigrants and harvesters down below, into the bargain. To get a first-class stateroom, you'd got to prove sixteen quarterings of nobility and four hundred years of descent, or be personally acquainted with the nigger that blacked the captain's boots. But it's all changed now; plenty staterooms above, no harvesters below—there's a patent self-binder now,…… and they didn't go by steamboat, either; went by the train.⁹⁾

ところで往時の貴族たる steamboatmen はどうなったであろうか? St. Louis の billiard-room では、昔は仮に50人の客があるとすれば、そのうちの30人か35人は river-men であり、乙にすました上品ぶった態度や、わざと金を見せびらかしてパッパッと使うその金ばなれのよきですぐ分ったものであった。その姿が今は見られない。又景気よく酒場の親爺に呼びかけて肩を叩く姿も見られない。まさしくかつての彼等の栄光は、今露のように消え失せてしまっているのである。

中でも花形であった pilot はどうであろうか? pilot の崇高な使命感、危険にさらされ、焔に包まれた操舵室で、船客を助けるため、“I will not go. If I go, nobody will be saved. If I stay, no one will be lost but me. I will stay.”¹⁰⁾ と叫ぶその自心負には変りはないとしても、その役割は変わっていた。政府は Mississippi 河を a sort of two-thousand-mile torchlight procession に変えてしまい、あらゆる crossing (渡し場) に明りを据えつけ、暗闇と云えるものをなくしてしまった。そして snag (倒れ木) を除去するために絶えず snag-boat を出してパトロールさせている。船上でも、暗闇に河幅の狭い chute (早瀬) にさしかかると、パッと電氣をつけて、瞬時に夜を日に変

えてしまう。霧の深い日には chart compass がある。piloting は馱馬車を御すのと同じ位安全で、簡単なものになった。更に注意してみると、船内では船長が一切の実権を握って pilot の上にたち、命令し、給料も多い。しかも荷揚げの時、pilot は町に出て紳士連と遊ぶどころか、ずっと操舵室にとじこもって、起きていなくてはならない。実に、

The government has taken away the romance of our calling; the Company has taken away its state and dignity.¹¹⁾

云うまでもなくここにある romance とは、一切の危険に対して、個人の能力の限りをつくして敢然と立ち向って行く、pilot の自由と独立性を指しているのである。Mark Twain はだみ声でどなり散らす Uncle Mumford に a mate (pilot) of the blessed old-time kind を見出し、町々の印象とか政府の河川治水策批判など、多くの紙数を費して紹介に努めているが、それも所詮、「もはや二度と帰って来ない、過ぎ去った時代を懐しむ心」が描く幻影に過ぎないようである。

その他の点景として、沿岸に蜿々とぎっしり積み上げられていた薪の山、それを現金で売って儲けていた wood-yard man、それらも船が石炭を焚くようになった今影も形もない。

The Adventures of Huckleberry Finn で我々にも馴染み深い筏師については

Up in this region we met massed acres of lumber-rafts coming d cwr.—but not floating down leisurely along, in the old-fashioned way, manned with joyous and reckless crews of tiddling, song-singing, whisky-drinking, breakdown-dancing rapsallions; no, the whole thing was shoved swiftly along by a powerful stern-wheeler, modern fashion; and the small crews were quiet, orderly men, of a sedate business aspect, with not a suggestion of romance about them anywhere.¹²⁾

昔は a steamboat bar は個人経営で、一儲け出来たものであった。併し今では、barkeeper はサラリーを貰って、雇われの身である。

In the old times, everybody traveled by steamboat, everybody drank, and everybody treated everybody else. Now most everybody goes by railroad, and the rest don't drink.¹³⁾

3) 鉄道、農産業の発達

イ、鉄道………H. D. Thoreau は鉄道もその一つ

の表われである物質文明のもつ俗悪さと危険性に対して、自然の立場から警告を発した。その著 Walden の中で、汽車について

I hear the iron horse make the hills echo with his snort like thunder, shaking the earth with his feet, and breathing fire and smoke from his nostrils……¹⁴⁾

と述べ、その煙と蒸気とシューシューという音によって眼や耳を損ってはいけなと象徴的に云っている。Mark Twain も一折では、Mississippi 河の sacred solitude を破るものとして

……ripping the sacred solitude to rags and tatters with its devil's war-whoop and the roar and thunder of its rushing wheels……¹⁵⁾

と述べ、更に至る所で、そのために steamboating が衰微している有様を、幾分の愛惜の念をもって描写している。併し勿論鉄道の立場は肯定していた。Mark Twain は New Orleans から St. Paul に至るあらゆる町に対して、steamboat 全盛時代の高い波止場使用料など一日も早く止めてしまって、鉄道によってもたらされる富と発展、次の20年間に必ずやってくる some noteworthy changes in the valley, in the direction of increased population and wealth, and in the intellectual advancement and the liberalizing of opinion which go naturally with these¹⁶⁾ の方に向うべきであると忠告している。

ロ、農産業……Chicot County, Arkansas の Calhoun Land Company は 綿花栽培の新しい動きとして注目される。従来のは planter の側では、土地は所有していても現金の資本がなく、土地と作物を抵当に入れて事業を始めざるを得ず、いたずらに委託売買人 (commission dealer) から搾取されるばかりであったし——委託人の分け前は収穫高の25%—— negro の側から云えば、特に南北戦争後 雇主との間が冷いばかりの事務的なものになり、一所に腰を落着けて働らく風潮がなくなったのにつけこんで、ユダヤ人から狙われ、不必要な品物までだまし買わされて、結局収穫時の自分の分け前は手に入らないどころか、借金まで背負いこんでいるという具合であった。これではいけないと現金制、直接買い、自己販売、及び低い金利、住宅などの negro 保護対策等を目的として、この会社が設立された。そして

It is hoped that the Calhoun Company will

show, by its humane and protective treatment of its laborers, that its method is the most profitable for both planter and negro ; and it is believed that a general adoption of that method will then follow.¹⁷⁾

尚従来打ち棄てられていた cotton-seed が油の材料として用いられているし、早晚その stem ですら、すぐれた飼料として用いられるであろう。

さとうきびは非常に進んだ、複雑な方法で栽培されているが、New Orleans 近くのある plantation の一acreあたりの収穫高は、昔の三、四倍になっている。

Natchez, Vicksburg, New Orleans には ice-factory が隆盛を極めている。昔は jewelry で金持だけしか買ええなかったのに、今では誰でも手に入れる事が出来る。

その他 the Rosalie Yarn Mill, the Natchez Cotton Mills Company の業績にふれた後で、Mark Twain は産業の意外な発展について

The changes in the Mississippi River are great and strange, yet were to be expected; but I was not expecting to see Natchez and these river towns become manufacturing strongholds and railway-centers.¹⁸⁾

時の流れは永遠の大河 Mississippi 河にも変化を与えていた。Mark Twain は eccentricity とか freak とかいう言葉を使って Mississippi 河の気まぐれな奇癖を随所に指摘しているが、それに直面した時の Mark Twain の気持は大体次のようなものである。

I wondered if I had forgotten the river, for I had no recollection whatever of this place ; the shape of the river, too, was unfamiliar ; there was nothing in sight anywhere that I could remember ever having seen before. I was surprised, disappointed, and annoyed.¹⁹⁾

かって pilot として覚えこんでいた岩や島や岬が小さくなったり、なくなったり、位置を変えたりしているのである。

The Ship Island region was as woody and tenantless as ever. The island has ceased to be an island ; has joined itself compactly to the main shore, and wagons travel now where the steamboats used to navigate. No signs left of the wreck of the Pennsylvania. Some farmer will turn up her bones with his plow one day,

no doubt, and be surprised.

併し河には勿論変らない面もあった。先ずその loneliness ——これについては昔の外国からの旅行者達が異口同音に deep, brooding loneliness and desolation と云っている事である(第27章 Some Imported Articles)。その他夏の夜明けや thunderstorm(有名な Alps 山脈のそれよりすばらしい)や the Upper Mississippi region における日没(the true Sunset Land)は、やはりこの上もなく美しい光景であった。逆巻く Missouri 河から流れてくる濁った水の mulatto(黑白混血児) complexion にも変りはなかった。

一 つ の 眼

旅は極く限られた tobacco-chewing region から boots のよく見られる地方に入り、淋しい landing-cabin のそばで黒人が手を振ったりしている the migrating negro region から the absolute South ——製糖工場と黒人部落が望見される大農園、熱帯の太陽と暑熱——に入っていく。併しその間にあって Mark Twain は、人の話や tradition などの間接的な方法ではあるが、執拗にある一つのものを追求しているように見える。暗い胎内を覗き見るように、一時代前の Mississippi 河周辺の暗い面を探り出そうとしている。それはいわゆる西部にしる、南部にしる、アメリカのフロンティアが、従ってその歴史が宿命として負っている暗さなのである。Kentucky, Tennessee 州境の、一族が死に絶えるまで暗い情熱をもってくり返された Feud(宿恨)による凄惨な死斗、negro による暴動と New Orleans 乗っ取りを計画した大がかりなギャング Murrel's Gang の、射ち殺した negro の内臓を取り出し、河に沈めてしまう残虐さ、55年前の Memphis 地方の粗野、野蛮さについて、英人 Mrs. Trollope の筆になるものではあるが

The total want of all the usual courtesies of the table; the voracious rapidity with which the viands were seized and devoured; the strange uncouth phrases and pronunciation; the loathsome spitting, from the contamination of which it was absolutely impossible to protect our dresses; the frightful manner of feeding with their knives, till the whole blade seemed to enter into the mouth; and the still more frightful manner of cleaning the teeth afterward with a pocket-knife,.....²¹⁾

Mark Twain が旅の終り近く、the great and populous Northwest にあって、たとえ guide-book に触

発されたものであっても、二、三の Indian tales and legends を取り上げているのも、この眼と無関係であるとは思われない。更にこの眼には、Ohio の奥地の金持ちの半飼いに見せかけて三人の gambler 達の罠にわざとかかり、逆に金をまきあげる professional gambler、故郷 Hannibal の saddler と carpenter ——前者は莫大の量の鞍が自分あてに送られてくるという「アメリカの夢」を見続けて、日に一、二度、あわてて上衣に腕を通しながら波止場まで駆けてゆく馬具屋、後者は血なまぐさい殺人犯人を気どって見せるホラふきの大工である——とが映っているようである。

The Civil War

南北戦争における Mark Twain の実際の経験が如何なるものであったにせよ、²²⁾ その民族の悲劇を Mark Twain は作家として取り上げる事によって、「内的に」処理しようとしている。第26章、Under Fire の The pilot's first battle はよくそれを物語っている。ある pilot が輸送船隊として南軍に加わり、実戦を経験する事になる。Belmont fight と云われるその烈しい戦火に自分の船も巻き込まれ、雨霰と降る砲弾の中を右に左に逃げまどう。しかもこの憶病者の pilot が、誰も見ている者がいなかったばかりに、後では大胆な勇士として祭り上げられる話である。つまり Mark Twain はここで戦争の烈しさを「経験」しているし、又いわゆる武勲赫々たる名声のもつ空虚さも「批判」しているのである。

次々に紹介されるかつての激戦地—Boston Massacre などの比喩ものにもならない大虐数の行われた the formidable Fort Pillow, river battles の中でも最も有名な Memphis、六週間の砲撃にさらされ、今尚土塁やひき裂かれた樹木や住民が避難した洞穴に残っている Vicksburg、河畔の夜戦とその二ヶ月後、8時間の死斗が行われた Port Hudson、或は更に、今は 16,600 の兵士が安らかに眠っている Vicksburg の美しい国立墓地の描写にすら、Mark Twain のこの内的経験が感じられる。

The whitewash is gone from the negro cabins now; and many, possibly most, of the big mansions, once so shining white, have worn out their paint and have a decayed, neglected look. It is the blight of the war.²³⁾

白い壁の色の变化にすら戦争の暗い影を見ている Mark Twain が戦争が終って20年近くたった今、北部では戦争は a distant subject for talk となったのに、

南部ではまだ余韻のようにくすぶっているのに対して敏感になり、次のように云っているのは当然である。

In the South, every man you meet was in the war; and every lady you meet saw the war. The war is the great chief topic of conversation. There, the war is what A. D. is elsewhere; they date from it. All day long you hear things "placed" as having happened since the waw; or du'in' the waw; or befo' the waw; or right aftah the waw; or 'bout two yeahs or five yeahs or ten yeahs befo' the waw or aftah the waw.²⁴⁾

Criticism

時代の証人たる Mark Twain は Baton Rouge から the metropolis of the South たる New Orleans に入ってゆくにつれて、特に南部がもつ一つの明白な矛盾に気づく。そして歴史の法廷で厳正な証人が吐く証言のように、それに対して鋭い批評を下す。

Mark Twain は ancien régime と教会の鎖を断ち切り、卑しむべき奴隷の国を自由人の国にしたフランス革命と、門閥より勲功制度を重んじ、王位から神性を剥ぎとった Bonaparte を肯定し、それらが人類に与えた liberty, humanity, progress の立場から、既に南部にも息づき始めていた the wholesome and practical nineteenth-century smell of cotton factories and locomotives を正しく嗅ぎとり、それを称賛するのに吝かでなかった。例を New Orleans にとれば、完成真近い Cotton Exchange (綿花取引所) の堂々とした美しい建物に公共建築物の夢を託し、下水道その他の sanitary improvements に one of the healthiest cities in the Union を感じとり、電燈、電話の設備、Journalism の繁栄に目をみはっているのは全てこの精神の表れである。もっともそれとは逆の、限られた例ではあるが、墓地の事から——New Orleans は "made" ground (埋立地) のため浅くしか掘れず、普通の市民は小さな家のような vault をつくり、その中に死者を葬っていた——医学のデータをもって来て、土葬の非衛生さを説き、費用のかからない火葬をすすめているのも、Mark Twain の合理性の表れと云える。ところがその Mark Twain に、同じその南部が「城」「血斗」「身分」或は「誇張した云い方」をもって迫り、Southern in sentiment とか jejune (dull) romanticism of an absurd past のしめっぽい姿を見せるのである。「城」について Mark Twain は次のように云っている

Keeping school in a castle is a romantic thing;

as romantic as keeping hotel in a castle. By itself the imitation castle is doubtless harmless, and well enough; but as a symbol and sustainer of maudlin Middle-Age romanticism here in the midst of the plainest and sturdiest and infinitely greatest and worthiest of all the centuries the world has seen, it is necessarily a hurtful thing and a mistake.²⁵⁾

又、New Orleans で毎年催される謝肉祭最終日の Mardi-Gras pageant については

It is a thing which could hardly exist in the practical North; would certainly last but a very brief time; as brief a time as it would last in London. For the soul of it is the romantic, not the funny and the grotesque. Take away the romantic mysteries, the kings and knights and big-sounding titles, and Mardi-Gras would die, down in the South. The very feature that keeps it alive in the South—girly-girly romance—would kill it in the North or in London.²⁶⁾

そして南部のこの矛盾或は後進性に一番大きな影響を与えた張本人として Sir Walter Scott を挙げ、その Ivanhoe を非難する。つまり Mark Twain の南部批判は、世間 to the medieval chivalry silliness の害毒を流した Sir Walter Scott 批判と裏腹になっているのである。ここに Mark Twain の南部批判の独創性が見られるし、更にはより大胆な、文学者らしい洞察に満ちた結論として次のような判断を下している。

Sir Walter Scott had so large a hand in making Southern character, as it existed before the war, that he is in great measure responsible for the war. It seems a little harsh toward a dead man to say that we never should have had any war but for Sir Walter; and yet something of a plausible argument might, perhaps, be made in support of that wild proposition.²⁷⁾

このような社会批評は Life on the Mississippi の後篇に一本の筋金を与え、作品の性格を明らかにしていると云えるが、勿論これは作者、Mark Twain の本質をなすものである。²⁸⁾

尚 Mark Twain の優れた言語感覚を示すものとして第26章と第44章で南部方言に対する批判がなされているが、これも The Adventures of Huckleberry Finn の文体と考え合わせて、興味深く思われる。

三部作の問題

R. E. Spiller は The Cycle of American Literature の中で、「事実上、一つの傑作を形づくっている三つの部分」として、The Adventures of Tom Sawyer (1876), Life on the Mississippi (1883), The Adventures of Huckleberry Finn (1885) を挙げ²⁹⁾ている。Mark Twain は1875年、Howells の依頼により、Life on the Mississippi (以下L.M. と略す) の前篇にあたる部分を“Old Time on the Mississippi”と題して、Atlantic Monthly 誌に寄稿し、翌1876年、The Adventures of Tom Sawyer (T. S.) を出版し、更にその直後 The Adventures of Huckleberry Finn (H. F.) の執筆にとりかかったが、途中で tank の水が涸れてしまい、数年間打ち捨てたままにしていたのを、1883年、L.M. 後篇の完成を契機として再び H. F. にとりかかり、1884年に完成した。³⁰⁾これ等三作相互の製作年代一つを取り上げても、三部作としての問題性は充分にありそうであるし、勿論その他にも作者の意図或は文体など、色々問題はあがるが、ここではもっぱら作品の素材の立場から、1) L.M. と T. S. 2) T. S. と H. F. 3) L.M. と H. F. の順に論じてみたい。

1) L.M. と T. S.

Mark Twain の旅行は21年ぶりであったとはいえ故郷 Hannibal は pilot になる以前に既に去っていたので、実に29年ぶりの訪問であった。

Mark Twain はある日曜日の早朝、写真のように明瞭に心に写っている故郷に、まるで死者の国から帰って来た人のような気持を抱いて上陸する。

I saw the new houses — saw them plainly enough — but they did not affect the older picture in my mind, for through their solid bricks and mortar I saw the vanished houses, which had formerly stood there, with perfect³¹⁾ distinctness.

町を見下す Holiday's Hill に登り、通りがかった老人に自分も含めて誰かれの消息をたずね、少年時代の追憶にふけり、又丘を下りて Sunday-school を見学したりする。そして過去と現在、夢と現実の奇妙に混じり合った時間を二、三日間にわたって経験する。

During my three day's stay in the town, I woke up every morning with the impression that I was a boy — for in my dreams the faces were all young again, and looked as they had looked in the old times; but I went to bed

a hundred years old, every night — for meantime I had been seeing those faces as they are now.³²⁾

この一種甘美な、胸を締めつけるような追憶の経験はそのまま T. S. の世界につながってゆく。つまり現実の Hannibal は St. Petersburg³³⁾ に変化する。ここに我々は卑小、浅薄な現実が、高い次元の世界に高められてゆく文学作品の秘密を見る思いがするのである。

二、三の具体例をあげると、先ず The Model Boy について ;

L. M. (P. 443~P. 444)

The Model Boy of my time — we never had but the one — was perfect : perfect in manners, perfect in dress, perfect in conduct, perfect in filial piety, perfect in exterior godliness ; but at bottom he was a prig ; and as for the contents of his skull, they could have changed place with the contents of a pie, and nobody would have been the worse off for it but the pie. This fellow's reproachlessness was a standing reproach to every lad in the village. He was the admiration of all the mothers, and the detestation of all their sons.

T. S. (P. 44)

; and last of all came the Model Boy, Willie Mufferson, taking as heedful care of his mother as if she were cut glass. He always brought his mother to church, and was the pride of all the matrons. The boys all hated him, he was so good. And besides, he had been “thrown up to them” so much. His white handkerchief was hanging out of his pocket behind, as usual on Sundays — accidentally. Tom had no handkerchief, and he looked upon boys who had, as snobs.

良心の問題……L.M. ではある少年の溺死事件とかマッチを借し与えた酔っ払いの焼死事件、T. S. では Injun Joe の殺人事件の目撃にからまる問題があるがいずれも雷鳴に神の怒りを感じて怯え、又寝言を云うのが特徴である。

L. M. (P. 434~P. 435)

There was a ferocious thunderstorm that night, and it raged continuously until near dawn. The wind blew. the windows rattled,

the rain swept along the roof in pelting sheets, and at the briefest of intervals the inky blackness of the night vanished, the houses over the way glared out white and blinding for a quivering instant, then the solid darkness shut down again and a splitting peal of thunder followed which seemed to rend everything in the neighborhood to shreds and splinters. I sat up in bed quaking and shuddering waiting for the destruction of the world, and expecting it.

T. S. (P.188)

And that night there came on a terrific storm, with driving rain, awful claps of thunder and blinding sheets of lighting. He (Tom) covered his head with the bedclothes and waited in a horror of suspense for his doom; for he had not the shadow of a doubt that all this hubbub was about him. He believed he had taxed the forbearance of the powers above to the extremity of endurance and that this was the result.

有名な Murrel's Gang の名前はどこにも出てくるが、T. S. の中の無実の罪人 Muff Potter が入っていた little isolated jail や、the shed of a deserted slaughter-house は L. M. (P.453) では

The slaughter-house is gone from the mouth of Bear Creek and so is the small jail (or "calaboose") which once stood in its neighborhood.

又 T. S. 第二章、Tom が罰として塀のペンキ塗りをしている所に Ben Rogers が steamboat の Big Missouri 号を真似ながら表われる場面は、さながら L. M. 前篇の pilot の世界を現出させる。

2) T. S. と H. F.

T. S. は少年の夢と冒険の物語であるが、H. F. が、それと関係があるのは、H. F. の中の牧歌的な部分、物語の初めの St. Petersburg や Jackson's Island の生活と、最後の Tom の協力による Jim の救出のみである。中でも一番関係が深いのは Jackson's Island の生活である。T. S. の中の Jackson's Island で海賊生活を目指す三人の少年達の筏下り、夜の mighty river、沿岸の燈火、森の中の焚火、冷えびえした夜明けと great Nature's meditation、鳥や虫の動き、水浴び、釣り上げた魚の料理、森の探険、the stillness, the solemnity that brooded in the woods, and the sense of loneliness (P.124)、或は烈しい夜の嵐など、全て H. F. の中の Huck 及び

Jim の Jackson's Island の生活と同質である。もっとも同じ civilization からの離脱といっても、前者は sentimental でちやちなのに対し、後者のそれは真剣で切羽つまったものではあるが。

村人達をのせた ferryboat が少年達の溺死体を探しに来る場面を一例だけあげると、

T. S. (P.125~P.126)

They sprang to their feet and hurried to the shore toward the town. They parted the bushes on the bank and peered cut over the water. The little steam ferryboat was about a mile below the village, drifting with the current. Her broad deck seemed crowded with people. There were a great many skiffs rowing about or floating with the stream in the neighborhood of the ferryboat, but the boys could not determine what the men in them were doing. Presently a great jet of white smoke burst from the ferryboat's side, and as it expanded and rose in a lazy cloud, that same dull throb of sound was borne to the listeners again.

"I know now!" exclaimed Tom; "somebody's drowned!"

H. F. (P.40)

I hopped up, and went and looked out at a hole in the leaves, and I see a bunch of smoke laying on the water a long ways up—about abreast the ferry. And there was the ferryboat full of people floating along down. I knowed what was the matter now. "Boom!" I see the white smoke squirt out of the ferryboat's side. You see, they was firing cannon over the water, t trying to make my carcass come to the top.

3) L. M. と H. F.

H. F. の筏下り、難破船、船の衝突、或は河の増水、霧、流木、倒れ木、嵐などおよそ Mississippi 河に関する一切の描写は、全て Mark Twain の pilot としての経験の所産であり、その点で L. M. 前篇と密接な関係があるのは云うまでもない。併し L. M. 後篇とのより深く、より重要な関係が、特に T. S. との比較において指摘されねばならない。これは既に、「一つの眼」及び「Criticism」の中でのべたフロンティアのもつ暗い面と関係することである。

L. M. 第26章の Darnell 家と Watson 家との争いの挿話が、H. F. の Shepherdson 家と Grangerford 家の宿恨として描かれているのは余りにも有名である

34) が、酔っぱらいの老 Boggs が Colonel Sherburn からあっけなく射殺される Arkansaw 事件でも、L. M.における南部批判と関係があるように思われる。Grangerford 家の家具調度類の細かな描写は、L.M. 第38章の the residence of the principal citizen, all the way from the suburbs of New Orleans to the edge of St. Louis の更に驚くべき微細な観察(5頁にわたる)で充分に裏づけられている。L. M. 第43章の景気のいい葬儀屋は H. F. 第27章の Peter Wilks の葬式に采配をふるう undertaker を連想させる。更にアルコール中毒のため tan vat (大桶)の中で死んだ Jimmy Finn や calaboose の中で焼け死んだ酔っ払いの浮浪人、政府のやり方を非難する老パイロットの Uncle Mumford などに、一部分だけではあっても、どこか Huck の父親をしのばせるものを感じるのは余りにもこじつけに過ぎるであろうか。

このように、Huck が遭遇する Mississippi 河沿岸の「大人」の世界はL.M. 後篇と深い関係をもっている。これを作者の側から云へば、21年目の Mark Twain の旅行が、「彼の記憶のなご眠っていた部分³⁵⁾を呼びさまし、それまで中絶していた第三の作品(H. F.)を完結しようとする意欲を起させた」のである。そして「若しかれがこの旅行をしなかったら、Huck Finn³⁶⁾ は永久に目の目を見なかったにちがいない」

註

- 1) 前篇は Howells の依頼により書かれ、それから8年の後に出版社から後編を加えてまとまった本にするよう要請され、旅に出た。
(P. E. Spiller: アメリカ文学の展開, 吉武, 待鳥訳, 北星堂 P.176)
- 2) Mark Twain, Life on the Mississippi (Harper and Brothers) P.187—18
- 3) Ibid., P.216
- 4) Ibid., P.453
- 5) Ibid., P.383
- 6) Ibid., P.489
- 7) Ibid., P.193
- 8) Ibid., P.231
- 9) Ibid., P.475
- 10) Ibid., P.364
- 11) Ibid., P.233—234
- 12) Ibid., P.476
- 13) Ibid., P.292
- 14) H. D. Thoreau, Walden (Kenkyusha) P.114
- 15) Mark Twain, Life on the Mississippi P.474
- 16) Ibid., P.309
- 17) Ibid., P.291
- 18) Ibid., P.327
- 19) Ibid., P.199
- 20) Ibid., P.252
- 21) Ibid., P.251
- 22) ○ 浜田政二郎, マーク・トウェイン—性格と作品 (研究社) P.69
「南軍の臨時ミズーリ部隊の募兵に応じ、中尉の職を与えられ、………たった二週間で軍隊を去った」
○ Life on the Mississippi P.367
「斗鷄は too pitiful a sight である」
○ Roughing It Vol. Ⅱ (Harper and Brothers) P.4—5
“……and discarded the revolver, I had never had occasion to kill anybody, nor ever felt a desire to do so,……”
- 23) Life on the Mississippi P.337
- 24) Ibid., P.363—364
- 25) Ibid., P.333—334
- 26) Ibid., P.374
- 27) Ibid., P.376
- 28) つまり The Prince and the Pauper や A Connecticut Yankee at the Court of King Arthur など, social criticism を含む全作品と結びつけて考えるべき問題である。
- 29) R. E. Spiller, アメリカ文学の展開 P.174
- 30) Ibid., P.175, P.176
R. A. Wiggins, Mark Twain: Jackleg Novelist (New York: American Book-Stratford Press, Inc. 1964) P.73
- 31) Life on the Mississippi P.428
- 32) Ibid., P.445
- 33) 小説の舞台となる村の名前, 尚 The Adventures of Tom Sawyer の Preface には “Most of the adventures recorded in this book really occurred; one or two experiences of my own, the rest those of boys who were school-mates of mine.” とある。
- 34) 浜田政二郎, マーク・トウェイン——性格と作品 P.64 其の他, Murrel's Gang (L.M.) と King と Duke (H.F.) 大根役者 (L.M.) と Hamlet の独白劇 (H.F.) の類似が指摘されている。

35) R. E. Spiller, アメリカ文学の展開 P.176

36) Ibid., P.167

○尚 The Adventures of Tom Sawyer, The
Adventures of Huckleberry Finn 共にHarper
and Brothers 版使用